徒然草　兼好法師　（第十九段）

折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ。
季節の移り変わりこそ、何事につけても味わい深いものである。

「もののあはれは秋こそまされ」と人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心
「もののあはれは秋がまさっている」　と誰もが言うようだが、　それも一理あるが、　今ひときわ心

も浮き立つものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかな
浮き立つものは、　春の風物で　こそあるだろう。鳥の声なども　格別に春めいて、　のどかな

る日影に、墻根の草萌え出づるころより、やや春ふかく、霞みわたりて、花も
日の光の中、　垣根の草が萌え出す頃から、　次第に春が深くなってきて霞がそこらじゅうに立ち込めて、花も

やうやうけしきだつほどこそあれ、折しも、雨・風うちつづきて、心あわたたしく散り過ぎぬ、
だんだん色づいてくる、　そんな折も折、雨風がうち続いて、心はせわしなく思ううちに散り過ぎてし

青葉になりゆくまで、万に、ただ、心をのみぞ悩ます。花橘は
まう。青葉になり行くまで、　何かにつけてひたすら人の心を悩ませる。　花橘は昔を思い出させるよすがと

名にこそ負へれ、なほ、梅の匂ひにぞ、古の事も、立ちかへり恋しう思ひ出でらるる。山吹が
して有名だが、　それでもやはり梅の匂いにこそ、昔のことも今が昔に立ち返って恋しく思い出される。　山吹が

の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて、思ひ捨てがたきこと多し。
清らかに咲いているのも、藤の花房がおぼろにかすんでいる様も、すべて、思い捨てがたいことが多い。

「灌仏の比、祭の比、若葉の、梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の
「四月の灌仏会のころ、葵祭のころ、若葉の　梢が涼しげに茂っていく頃こそ、　世のあわれも、　人恋

恋しさもまされ」と　人の仰せられしこそ、　げに　さるものなれ。　五月、菖蒲ふく比、
しさも高まるものだ」と、ある人がおっしゃっていたが、まったくその通りだ。　五月、屋根にあやめを葺

やしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも、あはれなり。六月祓、またをかし。
く端午の節句、六月の早苗を取って田植えするころ、水鶏のたたく声など、心細くないことがあろうか。　みすぼらしい家に夕顔の花が白く見えて、蚊遣火をいぶしているのも趣深い。　六月の夏越の祓も味わいがある。

七夕祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる比、
七夕をまつるのは、とても優雅なことだ。だんだん夜が寒くなってくる季節に、雁が鳴いて飛び渡ってくるころ、

萩の下葉色づくほど、早稲田刈り干すなど、とり集めたる事は、秋のみぞ多かる。
萩の下葉が黄色く色づく頃、早稲の田を刈り取って干しているのなど、趣深い事物は、　秋ばかりに集中している。

また、野分の朝こそをかしけれ。言ひつづくれば、みな源氏物語・枕草子などに
また、野分の吹いた次の朝はとても情緒がある。　言い続ければ　、みな源氏物語・枕草子などに

こと古りにたれど、同じ事、また、いまさらに言はじとにもあらず。おぼし
語りつくされて今更というものだが、同じことをまた今一度絶対に言わないと決めているわけでもない。

き事言はぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつあぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべ
筆にまかせて書くものの、つまらない手すさびであり、すぐに破り捨てるべき物なので、人の見るようなものでもないのだ。

きものなれば、人の見るべきにもあらず。

あはれ＝しみじみとした趣（心惹かれる特徴や雰囲気がある。）がある、風情がある

あはれ	をかし

共通	相違
趣がある・風情がある	しみじみと心動かされる　落ち着いた（しんみりした）
	余裕がある態度で、おもしろい・趣深い

霞＝空気中に浮かんでいるさまざまな細かい粒子のため、遠くがはっきり見えない現象のこと

萌え出す＝草木が芽を出す

花橘

梅

山吹

藤の花房

灌仏会＝陰暦四月八日のお釈迦様の誕生を祝う祭。①

祭＝陰暦四月中の酉の日に行われた祭

菖蒲ふく比＝五月五日端午の節句の行事。邪気払いのために屋根にあやめをふいた。②

早苗とる頃＝稲の苗を苗代から出して田に植える。六月ごろのこと。

水鶏＝水鳥。諸説あるがヒクイナ。「キョッキョッ」という声が戸を叩いているようなので「鳴く」ではなく「叩く」といわれる。田植えの時期の夕方から深夜にかけて哀愁ただよう声で「叩く（鳴く）」。③

蚊遣火＝蚊を追い払うために草などをいぶしたもののこと。④

六月祓＝六月の晦日の日に水際で行われる邪気を払う行事。⑤

萩

早稲田＝早めに植えた苗を、通常の稲より早めに刈り取ること。また早めに植えた稲のこと。

野分＝秋から初冬にかけての強風

さて、冬枯のけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止りて、霜

さて　冬枯の気色こそ　秋にほとんど　劣らないだろう。水際の草に紅葉が散り留まって、霜が

いと白うおける朝、遣水より烟の立つこそをかしけれ。年の暮れ果てて、人ごとに

たいそう白く下りている朝、遣水から水蒸気が立っているのは大変趣深い。年も暮れてしまって、人は誰もお互

急ぎあへるころぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の寒けく

いにあわただしい頃こそ、比べようもなく趣深い。殺風景で興ざめなものは、見る人も無い月が寒々と

澄める、廿日余りの空こそ、心ぼそきものなれ。御仏名、荷前の使立つなどぞ、あはれ

澄んでいる十二月二十日過ぎの空こそ、心ぼそいものである。御物名・初穂を奉る勅使が立つのなどは、情緒

にやんごとなき。公事ども繁く、春の急ぎにとり重ねて催し行はるるさまぞ、いみじきや。

深く高貴なものだ。宮中の諸行事が、春の準備の忙しい時に重ねて行われるさまこそ、結構なことである。

追儺より四方拝に続くこそ面白けれ。晦日の夜、いたう闇きに、松

大晦日の追儺式から、元旦の朝の四方拝まで、一続きに行われるのは実に面白い。大晦日の夜、たいへん暗い中に、松

どもともして、夜半過ぐるまで、人の、門叩き、走りありきて、何事にかあらん、ことこと

松明をともして、夜半過ぎまで、人の家の門を叩き、走り廻って、何事だろうか、大声で

しく　ののしりて、足を空に惑ふが、暁がたよりさすがに音なくなりぬるこそ、

騒ぎ立て、足が地につかないほど走り廻るが明け方には、やはり音もなくなってしまうのは、

過ぎ去る年の名残も心細いことだ。

年の名残も心ぼそけれ。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に変りたりとは見えねど、ひきかへ

こうして明け行く空の気色。昨日に変わったとはみえないけれど、打って変わって実に清新な心地がするも

する。大路のさま、松立てわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

のだ。都大路のようすも、門松を家々に立てて華やかにうれしげなのこそ、また趣深いものだ。

亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、このごろ都にはなきを、東のかたには、

亡くなった人の霊魂が帰ってくる夜ということで魂を祭る行事は、ころごろ都では行われないが、東国には、

なほする事にてありしこそ、あはれなりしか。

いまだに行うことがあるというのは、情緒深いことだ。

①灌仏会

②菖蒲ふく比

③蚊遣火

④水鶏（クイナ）

⑤六月祓（みなつきばらえ）

けしき＝（気色）物事のようす。自然界のありさま。

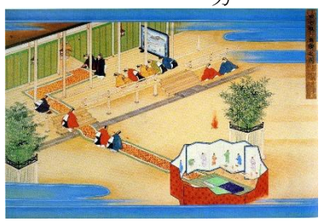
汀＝海や湖など水と陸地が接している水際のこと

遣水＝邸宅の敷地内の泉や外から水路を設けて引き込んだ川の水を、南庭の池に注ぎ込むように流したもの。

すさまじ＝殺風景だ。荒涼としている。

御仏名＝一年間、犯してしまった様々な罪を浄めるため、改めてお念仏をお称えし、礼拝をする法要。

荷前の使＝荷前を奉る（繊維製品を陵墓・王の墓へ奉納する）行事のために朝廷から派遣された遣いの者のこと。

追儺（式）＝災いをもたらす悪鬼を神の化身である方相氏が退治し厄を払う儀式のこと

四方拝＝毎年元日の早朝、宮中で天皇が天地四方の神祇を拝する儀式。四方を拝し、年災消滅、五穀豊穣を祈る宮中祭祀